

暗闇のなかで、何者かが近寄ってくる気配がした。目の前で立ち止まった。同時に、びしっと頬を張られた。すごい力だった。江梨は一瞬頭がくらくらし、その後、痛みと熱が頬に浮き上がるのを感じた。

急激に、大量の光が弾けたように網膜に飛び込んできた。暗い部屋に明かりがつけられたのだ。あまりの眩しさに目をつむった。ようやく視界が明瞭になった。目の前に、イシユータルと名乗る娘が立っていた。

「ふふ、気分はどう？」

小柄なイシユータルは、せいっぱい爪先を延ばし、長身の江梨の顔に息がかかるくらいに近寄った。江梨は顎をぐいとあげ、威厳を保とうとした。

部屋の広さは四畳半くらい。コンクリートの壁が打ちっぱなしだった。江梨は両手を後ろ手に縛られていた。両足首にも太い縄がきつく縛られていて、背後の壁に剥き出しになった配管に固定されている。

イシユータルが手を延ばして、江梨の頬を撫でた。江梨は顔を動かして掌を振り払った。

「何か用？」

イシユータルは一瞬むっとした表情になったが、すぐに微笑みで打ち消した。

「あんだ、かわいいね。私の好みだよ」

腫に宿った欲情の炎を見て、江梨はぞつとした。イシュタールは、江梨の豊かに盛り上がった乳房を撫で、それから柔らかく揉みほぐしはじめた。

「姉は、あれ奥手だからね。こういうこと何も知らない。だから、可愛い子だって容赦しない。でも私は別だよ。楽しむってことを知ってるんだ。だから……」

イシュタールは、江梨の顎を嘗めた。江梨の肌が総毛立った。

「言うこときけば……あんたは見逃してやってもいいんだぜ」

「言うこときくってどういうことよ」

江梨は、執拗に嘗めてくるイシュタールの舌先から逃れようと身を振った。

「ここで私と暮らす……私のペットとしてね」

イシュタールが、ぎゅつと江梨の股間をつかみ、また爪先を延ばして、江梨の唇に自らの唇を寄せようとした。

我慢の限界だった。江梨は、イシュタールの顔に唾をはきかけた。

「野郎！」

イシュタールの顔が憤激に歪み、同時に江梨は股間に凄まじい激痛を感じた。イシュタールが、拳を固めて江梨の股間を殴りつけたのだ。もっとも敏感な部分に打撃を受け、江梨は思わず悲鳴をあげた。

「馬鹿にすんじゃねえぞ！ こじや私らが王様なんだ。お前らなんか、私らの言うこときくしか、こじや生きていく道はないんだ」

イシュタールは、凶暴な本性を露にした。江梨の乳房やみぞおちを何度も殴った。江梨はその都度悲鳴を挙げ、身を振った。だが、きつく縛られているため、凶暴な攻撃を避けることもできない。眼から涙がこぼれた。

イシュタールは攻撃を中断し、江梨の頬につたう涙を嘗め、満足そうに微笑んだ。

「どう？ 言うことをきく？」

「やだ！」

江梨は、ぜいぜいと肩で息をしながら、声を絞り出した。

「こいつ！」

イシュタールの平手打ちが江梨の頬で弾け、同時に、膝が股間に叩きつけられた。

江梨は絶叫した。

「お前らはここだ」

ドアがぎいと開く音がした。目隠しをされ、後ろ手に縛られた亜紀と若菜は、背後から乱暴に突き飛ばされ、床に転がった。同時に、ドアが閉まった。

「畜生！ 出せ！ 馬鹿野郎！」

亜紀は体を起こしてわめいた。平手打ちが飛んできた。亜紀は再び床に伏した。

「わめくんじゃねえよ。いま、目隠しとってやるから」

目隠しがとられた。髭面の太った男がにたにたとしていた。

「お前さんらには、何をしてもいいって許可が出たからよ……。へ、へ、へ。何年ぶりだろうな。溜まったもんを抜かせてもらうぜ」

亜紀はぞつとして後ずさりした。若菜も体を起こし、目を見開いて大男を見つめている。

「すぐに、もう一人来る。二人ずつ、交替で、あんたらとやっていいって言われてっからな。全部で二十人だから、終わるまで十回やんなきゃなんねえんだ。俺らはくじ引きで一番目に当たったからよ。へへ、ラッキーだぜ」

男は屈み込んで亜紀の顔をのぞきこんだ。

「すげえ胸してんなあ……。もう我慢できねえ」

男はいきなり亜紀を押し倒した。亜紀は悲鳴をあげた。男は、片手で亜紀の股間をまさぐり、片手で胸をほだけ、唇を豊かな乳房に押しつけた。亜紀は処女ではなかったが、暴行されるのは初めてだった。圧倒的な力が亜紀を押しえつけ、四肢の自由を奪っていた。屈辱と恐怖が、彼女の体を硬直させていた。目から涙が零れた。もう駄目だ……。言いなりになるしかない……。

そのとき。

男が急に体を起こし、そのまま硬直した。目が大きく見開かれ、口が半開きになっている。息

が詰まったような顔だ。

一瞬、何が起こったのか亜紀には理解できなかった。やがて、男はどつと亜紀の上に倒れかかった。亜紀は必死に体を振り、男の下から這い出した。体を起こして見ると、男は股間を両手で押さえ、目を閉じて苦痛に顔を歪めている。男の背後には若菜が、手を縛られたまま立っていた。

「若菜……あんた」

若菜は何度も頷いた。彼女は無我夢中で、男の股間を後ろから蹴りあげたのだ。

と、ドアが開いた。

「おう、待たせたな……」

一人の青服が入ってきた。亜紀は無意識のうちに男に走りより、股間を膝で蹴りあげた。

「ぐふっ！」

膝頭がみごと睾丸に命中した。男は呻き、両手で股間を押さえて前屈みになった。亜紀は体ごと男にぶつかった。男はよろめき、背後の壁に後頭部をぶつけ、そのまま失神した。

「や……野郎……」

若菜に股間を蹴られた男が、やっと立ち上がった。怒りと苦痛に醜い顔をますます醜く歪め、こちらを睨んでいた。二人の少女は怯えた。

男は足を一步踏み出したが、股間の激痛に顔を顰めた。立っているのがやっこのようだ。

亜紀は若菜を見た。若菜も亜紀を見た。若菜は呟いた。

「やるしかないよね」

亜紀は頷いた。

二人は同時に男に向かって突進し、同時に、足をあげて男の股間を蹴った。男の股間は両手でガードされていたが、睾丸に新たな激痛に与えるのに十分だった。男は、床に膝をつき、そのまま前倒しにくずおれた。

「こんのやるー！」

亜紀と若菜は、男の体の上に殺到し、何度も何度も、蹴りを入れた。男は転げ回って攻撃から逃れようとしたが、二人の少女は形相凄まじく、容赦なく男を蹴りつけた。肋骨が何本か折れ、踏みつけられた掌から血が噴き出した。亜紀が男の頭部を蹴った。男の耳から血が噴き出し、男は白目を剥いて失神した。

男たちが動かなくなったのを確認した二人は、お互いのいましめを解いた。

「やったね……」

「うん……やった……」

二人は喘ぎながら言った。両手を縛られながら、二人の男を打ち倒したのだ。全身に力が漲ってきた。

私たちにもやれる！

「助けなきや……」

亜紀は言った。若菜は頷いた。

「そうだね……助けなきや。でも、どうする？ 不用意に外に出て見つかったら……」

「また、タマを蹴ってやればいいよ」

亜紀は自信に満ちた表情で答えた。若菜は微笑んだ。

「よおし。やってやるうじゃん。ところで、こいつらはどうする？」

「また、起き上がってきたら面倒だ。きちんと玉を潰しておこうぜ」

亜紀は、うつ伏せに失神している髭男に近づき、ズボンを脱がせた。汚い尻の下に、腫れ上がった陰囊が露わになっていた。亜紀は、睾丸に踵を載せ、全体重をかけた。睾丸は呆気なく、こりっと音を立てて潰れた。大男が体をのけぞらせ、大きく痙攣した。蛙が踏みつぶされたような声をたて、すぐに意識を失った。亜紀は残った一つを踏み潰した。

壁際で失神していた男が意識を取り戻し、「あつ」と叫んだ。亜紀と若菜が振り向くと、男は目を見開き、立ち上がろうとして股間の激痛に再びくずおれた。

「若菜、そいつはあんたに任せるよ」

亜紀が乾いた声で言った。若菜は微笑みながら男に近づき、胸ぐらをつかんで、「立て」と言った。男は「わ、わ……」と恐怖に満ちた声を出した。青服たちは、イシスとイシユタル姉妹にさんざん苛まれていたため、基本的に女性恐怖症に取り憑かれている。もはや、抵抗する気力もなく、涙を流しながら、「お、お願いです……許して下さい……もうしません……助けてくだ

さい……」とだらなく哀願した。若菜は、男の醜態に嫌悪感を覚えながらも、相手をそんな立場に追い込んだ自分に対する満足感で満たされてゆくのを感じた。

「だめ。もっと痛い目にあわせてあげる」

言うなり若菜は男の股間を膝で蹴りあげた。男は呻き、体を前に折り曲げた。若菜は男の髪の毛をつかんで、壁に叩きつけた。男は悲鳴をあげ、両手で頭部を覆った。若菜はすかさず、から空きの股間をつかんだ。男は抵抗したが、若菜は陰囊を探りあて、ぎゅっと睾丸をひねりあげた。すでに傷めつけられた睾丸が一つは、呆気なく潰れた。男は紙のようにへなへなとくずおれた。若菜は、失神した男のズボンをずりおろした。陰囊がボールのように膨れていた。若菜は、思い切り足を後ろに撥ね上げ、勢いをつけて陰囊を蹴った。

ぱんと音がして陰囊が破裂した。若菜は裂け目から流れだした睾丸を踵で踏みにじった。

そつとドアを開けた。廊下にはさいわい、誰もいなかった。若菜と亜紀は、忍び足で廊下に出た。廊下の外はすぐに裏山だった。窓から出て裏山に逃げ込めば、なんとかなりそうだ。しかし、それでは江梨は見殺しにするしかない。

二人は顔を合わせた。声に出さなかったが、二人とも、すぐに窓から外に逃げだしたいという衝動と、江梨を助けなければならないという良心の呵責とが、心のなかで争っていた。迷いは、結局、次の行動に出るのを躊躇させるだけだった。

「なにしてるー！」

はつと振り向くと、隣室のドアが開き、青服が一人顔を出していた。二人は弾かれたように突進した。青服は突き飛ばされ、室内に尻餅をついた。亜紀が青服の股間を踏みつけるように踵で蹴った。青服は悲鳴をあげ、股間を両手で抑え床を転げまわった。

室内にはもう一人の青服がいた。若菜が呆然と突っ立ったもう一人に飛び掛かり、股間に膝蹴りを浴びせた。もはや、怖いものなしの少女たちは、床を転げまわって悶絶する二人の青服をさざんざん蹴りつけ、失神に追い込んだ。

見舞わずと、そこは炊事室だった。冷蔵庫や食器棚があり、プロパンガスのボンベが二つほど並んでいて、ホースでガスコンロに繋いでいる。鍋に火がかかっていた。

若菜が思いついたように言った。

「もう一個のボンベの栓を開けっ放しにしとけば、爆発するんじゃない」

「なるほど」

亜紀は賛同した。

「混乱させといて、江梨を助け出すってそういうことね」

二人は、ガスボンベの栓を開けた。臭気を帯びたガスが勢い良く噴き出した。亜紀と若菜は急いで廊下に出て、裏山の茂みのなかに駆け込んだ。

五分後。凄まじい爆発音が轟いた。

崖の上から施設を見張っていた優美は、爆発音に思わず立ち上がった。

施設の一角の窓ガラスが吹き飛び、そこから煙がもうもうと立ちのぼっていた。施設のなかにわかに騒がしくなった。

——何か、あったんだ……。

いずれにせよ、飛び込むなら今がチャンスだ。

江梨をいたぶっていたイシュタールは、爆発音に思わず部屋を飛び出した。ドアを開けると、一人の青服が走ってきたところだった。

「何があったんだ！」

イシュタールは青服の胸ぐらをつかんで問うた。

「ば、爆発みたいです」

「爆発？」

「ええ、炊事室が」

「ばかやろ、気をつけろ」

イシュタールは、青服の股間を蹴りあげ、そのまま炊事室へと駆け出した。江梨は一人、部屋に取り残された。青服は、ドアのところまで、股間を押さえ、膝について苦しんでいる。

と、その青服の体が部屋のなかに吹っ飛ばされた。同時に、亜紀と若菜が飛び込んできた。若菜は青服の襟首をつかんで立たせた。亜紀は、その青服の股間を何度も蹴りあげた。青服は壘丸を蹴り潰され、血反吐をはいて失神した。

二人の少女は青服が失神したのを確認し、江梨のいましめを解いた。

「大丈夫だった？」

「うん。ありがと……あの爆発は、あんたたちが？」

「そうだよ」

二人は豊かな胸を誇らしげにはった。

「て、てめえら！」

青服がもう一人、部屋に駆け込んできた。三人の少女たちは青服に殺到した。江梨が正面から股間を蹴りあげた。ほぼ同時に、亜紀が背後から股間を蹴りあげた。青服は悲鳴をあげ、四つん這いになって倒れた。若菜は後ろから手をのばして陰囊をつかみ、握り潰した。

「なんだ、これは！」

炊事室の前に、イシスとイシュタール、そして早坂や亀山ら信者たちが集まっていた。ガス爆発の威力は凄まじく、炊事室のドアを吹き飛ばし、廊下のガラスもすべて割れていた。

炊事室からは、二人の青服の死体の肉片が、ばらばらになって壁に叩きつけられていた。その

隣室では鞆丸を潰されて瀕死の青服が二人、転がっていた。むろん、閉じ込めていたはずの二人の捕虜は影も形もない。

「どういふことだ。あの二人の仕業か……」

早坂は呻いた。イシスはその早坂の胸ぐらをつかみ、股間に膝蹴りを食わせた。

「どういふことだ、じゃねーだろ！ てめえの責任だ」

早坂は股間を抑えてうずくまった。イシスはさらに、隣に並んでいた亀山の股間にも膝蹴りをたたき込んだ。

「さっさと、あの二人を捕まえてこい！」

早坂は、涙を流しながらやつと体を起こし、青服たちに指示を出した。青服は青い顔で駆け出した。早坂と亀山も、よたよたと歩き出した。

イシスとイシユタールは、自分たちの部屋へと去っていった。三人ほどの青服が残り、後片付けを始めた。

そこに飛び込んできたのが優美だった。あつという間に三人の青服は鞆丸を潰されて転がった。

「優美！」

二階に駆け上がった優美は、足元に転がった青服につまずき、すんでのところで転びそうになった。両手で股間を抑えて悶絶していた青服は、まともに頭を蹴られて失神した。顔をあげると、

廊下に江梨、亜紀、若菜の三人が立っていた。

「大丈夫だったんだね」

優美はにっこり微笑み、しばし再会を祝した。

「後はダイヤを押さえなきゃね」

優美は言った。

「亜紀、若菜、あんたたちは先に逃げてな」

「なんでだよお」

二人はふくれっ面で言った。

「こつから先は、ほんとの戦いだ。相手だってダイヤを守るためには必死になる。怪我したくなかったら、外で待ってろ」

「だつてえ……」

二人は何か言おうとして口を噤んだ。優美の眼は真剣だった。触れば切れるような雰囲気があった。

「さっさと行け！」

優美は一喝した。若菜と亜紀は、すごすごと背中を向け、去っていった。江梨が言った。

「ちよつと可哀相じゃない。あの二人、結構、がんばってたのに……」

「青服はともかく、あの姉妹はただ者じゃない。また人質にとられたりするかもしれない……」

下手に自信がついたときほど危ないっていうじゃないか」

信頼できない二人が混じっているよりも、信頼できる相棒が一人だけのほうがやりやすい。優美はそう確信していた。

玄関から外に出るまで、幸い誰にも見つからずにすんだ。亜紀と若菜は、玄関に近い茂みのなかに身を隠した。

「どうする？」

若菜が言った。亜紀は憤懣やる方ない表情で答えた。

「どうするって……ここで待機だよ。あいつら、私らを外してダイヤを独り占めするかもしれないじゃないか」

「あ、そっか」

若菜も唇を噛んだ。

「そうはさせるもんか」

施設にはただ一つ、地下室があった。地下室には階段をおりて、重い金属製の扉を鍵で開けなければ入れない。そこは、姉妹以外は立入禁止となっていた。

「ど、どうするんです？」

扉の前に立ち、ポケットを探り始めた早坂に、亀山は不安そうに声をかけた。

「どうするって……逃げるんだよ。ダイヤと金をもらってとんずらだ」

ここに来る途中、あの女たちとは出くわさずにすんだのは幸運だった。施設のそこかしこに、男性としての機能を完全に破壊され、激痛と屈辱に苛まれながら絶望に満ちたうめき声をあげて悶絶する青服たちが転がっていた。まだ無傷の信者たちも、いずれあの女たちによって不能にされるだろう。巻き添えを食らってはたまらない。あの凶暴な姉妹に忠義だてする理由などない。逃げるが勝ちだ。

「しかし、鍵が」

「鍵か。これを見ろ」

早坂はにやりとしてポケットから取り出したものを見せた。

「あ」

「合鍵だ。こっそり作っておいたんだ。こんなときのためにな」

重い扉が開いた。がらんとした地下室に、小さな金庫が置いてあった。教壇の現金はもはや残り僅かだったが、逃亡資金には十分だった。あとはずた袋一つぶんのダイヤを金に換えることが出来れば、裏世界で再起することも可能だろう。

早坂は金庫を開けて札束をダイヤの袋に突っ込んだ。

「さ、ぐずぐずしないで行くぞ」

「俺が持ちましようか」

「かまわん」

いざとなったら、亀山を楯にして自分一人だけでも逃げるつもりでいた。

「そうはいかないっすよ」

亀山は抗議した。

「そんなこと言って、いざとなったら一人で逃げるつもりでしょ。ここは二つに分けて、一つずつ持つてるってことにしましよや」

「時間がねえだろうが」

「だって……」

「もう仲間割れかい？」

二人はぎよつとして振り向いた。扉のところにはイシスとイシユタールが立っていた。

早坂と亀山はわつと叫び、尻餅をついた。

「姿が見えないと思ったら……やっぱり逃げるつもりだったとはね」

姉妹はゆつくりと二人に近づいた。早坂と亀山は恐怖に震えながら、後ずさりした。

「当然の罰を受けてもらうよ」

二人の男たちは顔を見合った。早坂は唇を噛み、決意したように言った。

「畜生……こうなったらヤケだ」

早坂は、懐からナイフを引き抜いた。亀山は、足元の鉄パイプを拾い上げた。

男たちはわめきながら突進した。

虚しい抵抗だった。イシスは足をあげて早坂のナイフを蹴り上げた。つんのめった早坂の腰を蹴り、四つん這いになったところを、背後から股間を蹴りあげた。早坂は呻き、うつ伏せになった。イシスはその背中に跨がり、髪の毛をつかんで顔をあげさせた。

「身の程知らずのチンピラ！ 蛆虫！」

イシスはわめきながら、早坂の顔を何度も床に叩きつけた。額が割れ、顔面が血だらけになった。イシスは立ち上がり、早坂の襟が身をつかんで引っ張り起こし、股間を膝で蹴りあげた。

早坂の体が宙に浮くほどの凄まじい蹴りだった。イシスはくずおれそうになる早坂の体を支え、三度、立て続けに膝蹴りを食わせた。早坂は血反吐を吐いた。

イシスが手を離すと、早坂はぼろ切れのように床にくずおれた。

一方、亀山は股間を蹴られ、簡単に鉄パイプを奪われた。床を駆け回る亀山の体に何度も鉄パイプが振り下ろされた。イシユタールは、戦意を失った亀山の腕をねじ上げ、何度も蹴った。ぼきつと音がして亀山の右腕が折れた。亀山は悲鳴をあげた。イシユタールは今度は左腕をへし折った。亀山は絶叫し床を転がった。イシユタールは、亀山の胸板に左足を載せて押さえつけ、右足で何度も股間を蹴った。亀山は体を振りながら泣き叫んだ。両手で股間をガードしようにも、折られていた。睾丸は碎かれ、陰囊は破裂し、血が噴き出した。

「馬鹿なやつらだ」

姉妹は、息もたえだえの二人の男たちを見下ろし、唾をはきかけた。

「イシス、これからどうするの？」

イシュタールが訊ねた。部下たちは全滅した。生活能力のない姉妹には、従順な部下なしでどうやって生きてゆけばよいのか見当もつかない。

「わかんねえよ」

イシスは苛立って怒鳴った。

「とにかく、ここは出ようぜ。ケチがついたからな。まあ、このお宝持っていればなんとかなるさ。それより、あの女どもをやっつけてしまわないと……」

「ここにいるよ」

声が出た。姉妹は扉のほうを見た。

優美と江梨が立っていた。

「話をつけようぜ」

優美は静かに言った。イシスは声を荒らげた。

「なんの話だよ」

「そのダイヤ、少し分けてくれれば、おとなしく出ていってもいい。別に全部くれなんて言わな

い。ただ、こつちには一億円ほど必要なんだ」

優美は江梨に顎をしゃくった。

「この子の弟の命がかかっているもんでね。それと、あの二人の取り分。合計で三億円ほどでいい。そのダイヤは、時下数十億円だから、十分の一貫えればいいだけなんだ。後は、あんたたちで好きにすればいい。悪くない条件だろう？」

イシスは怒鳴った。

「馬鹿言ってるんじゃないか。これは全部あたしらのもんだ。私らが見つけたんだ。当然だろ。一個だってやるもんか！」

「そうこなくちゃね」

江梨がにやりと笑った。

「決着つけようぜ。妹のほうは私がやる。いいでしょ、優美」

「分かった」

優美はうなずき、イシュタールに向かって言った。

「ここじゃ狭い。上に行こうぜ」

地下室には、江梨とイシュタールの二人だけとなった。

「さつきは、よくもいたぶってくれたね……倍返しにしてあげる」

江梨は言った。イシュタールは鼻で笑った。

その瞬間、江梨の脚が飛んできた。目にも見えぬ早業だった。江梨の脚の長さは、イシユタールの目測を越えていた。足の甲が的確にイシユタールの股間の敏感な部分を撃った。イシユタールは激痛に息が詰まった。股間を両手で抑えてうずくまった。そのイシユタールの顔を、すかさず江梨の足の甲が襲った。イシユタールは無様に仰向けに倒れた。大きく広がった股間を、江梨はしたたかに蹴りつけた。イシユタールは悲鳴をあげ、悶絶した。

階段を昇りながらイシスは言った。

「どこまで行くんだ？」

「屋上さ」

優美は答えた。

「昔から決闘は屋上と相場が決まってるだろ」

がらんとした、コンクリート剥き出しの屋上で二人は対峙した。

「さつき一億でいいって、お前、言ってたよな」

イシスが、険しい顔を崩さぬまま言った。優美は首をかすかに傾げた。

「あの女の弟を助けるために、うちの信者たちを使い物にならなくしたってわけか」

「まあね」

優美は微笑んだ。

「それだけじゃあ、ないだろ。お前、楽しんでるだろ」

「なにを？」

「なにもかもをさ」

イシスがにやりと歪んだ笑顔を浮かべた。

「分かるさ。あんたも私と同じだってことがね」

優美は微笑んだ。

「一緒にされたくないな。あんたと違って、私は他人を支配しようなんて思わないもの。自由に生きたい。邪魔する奴は容赦しない。それだけなもの」

イシスは再び険しい表情に戻った。

「そうか。私は、思うとおりにならない奴は容赦しない。あんたもその一人……」

イシスの体がふわりと宙を舞った。空中で体を一回転させ、鋭い蹴りが優美を襲った。優美はあやうく体かわし、着地したイシスに右脚で蹴りを繰り出した。イシスは腕で蹴りを受け止めてガードし、優美の右脚をつかんだ。優美はバランスを崩しかけたが、素早く体をひねり、地面に両手をつき、左脚の踵をイシスの顎に打ち込んだ。イシスの体が吹っ飛び、屋上の柵に叩きつけられた。

優美はぱっとイシスに走り寄り、両耳を両手で撃った。イシスは悲鳴をあげ、両手で耳を覆った。優美はすかさず、イシスの股間を膝で蹴りあげた。イシスは目を見開き、股間を両手で抑え

てうずくまった。

江梨の攻撃は容赦なかった。

股間を抑えて苦悶するイシュタールの右腕をとってねじあげ、それから膝でイシュタールの豊かな乳房を何度も蹴りあげた。蹴られる度にイシュタールは泣き叫んだ。左手で乳房をガードすると、今度は顔面を蹴った。鼻柱が折れ、愛らしい童顔が血にまみれた。イシュタールはがりりと床に膝をついた。

「立て！」

江梨はイシュタールの股間を爪先で蹴りあげ、それから右腕をへし折った。

ボキッと嫌な音が響き、イシュタールの凄まじい絶叫が室内に響きわたった。江梨は左腕をねじあげ、へし折った。

美少女は戦意を喪失した。もはや思いならぬ両腕は肩から垂れ下がっているだけだった。仰向けに倒れ、体を折り曲げ、無慈悲な攻撃から身を守ろうと転げ回った。

優美は、仰向けになったイシスの上に跨がり、喉をしめつけていた。イシスは必死に抗った。指を突き出して優美の眼を突こうとした。優美は顔を背けて避け、イシスの頬を殴りつけた。イシスは一瞬、呆然となったが、凄まじい表情で反撃した。両手を伸ばし、優美の乳房をつかんだ。

「うっ！」

優美は呻いた。イシスは優美の乳房に爪をたて、深く食い込ませた。急所を攻撃され、優美は苦痛に顔を歪めた。

優美も負けてはいなかった。仰向けになったイシスの盛り上がった乳房を殴りつけた。イシスは悲鳴をあげてのけぞったが、なおも優美の乳房を離そうとはしなかった。

「離せ！ 野郎、離せ！」

優美は叫び、さらにイシスの乳房を殴った。だが、イシスの忍耐強さはおそるべきものがあった。イシスは急所を殴られながらも、上半身を起こし、優美の額に頭突きを食わせたのだった。

優美は仰向けにひっくりかえった。イシスは、全身の激痛を堪えながら起き上がり、優美の股間を踏みつけるようにして蹴った。優美は悲鳴をあげ、両手で股間を抑えた。イシスはすかさず、優美の乳房を踏みつけた。優美は体を曲げて悶絶した。

「……調子にのりやがって、この雌豚！」

イシスは、太股で優美の首を挟み、しめつけた。優美は必死でもがいたが、イシスの脚力はすさまじかった。次第に優美の脳は酸欠状態に陥り、思考能力が徐々に奪われていった。

「死ね！ 地獄に落ちやがれ！」

イシスは罵りながら、太股を締めつけつづけた。

優美の視界が次第にとざされていった。全身の筋力が奪われた。優美はだらりと両手を垂らし

た。イシスは、にやりと笑い、とどめをさすべく、脚に力をこめた。その瞬間、優美の意識が突然、明瞭になった。右手が一人で動いた。イシスの股間の敏感な部分をつかみ、ぎゅっとひねりあげた。

「うっ！」

イシスが呻いた。脚の力が急速に抜けた。いまだ。

優美は顔を起こし、イシスの股間にかみついた。

「ぎゃあああああ！」

イシスが絶叫した。優美は柔らかな陰部に立てた歯を食い込ませた。血が噴き出した。

優美は立ち上がった。イシスが、血まみれの股間を抑え、うつ伏せになって悶絶していた。優美は彼女の髪の毛をつかんで立たせ、乳房を膝蹴りにした。股間を覆っていたイシスの両手が乳房をガードした。優美は、膝で股間を蹴りあげた。イシスはまたも絶叫した。優美は、何度も何度も、たてつづけに相手の股間を蹴った。イシスの陰部の傷口が裂け目を拡げ、血が迸った。

ぼろ雑巾のように床に突っ伏したイシュタールを見下ろしながら、江梨は唾をべっと吐き捨て、脇を蹴った。

両腕をへし折られ、両眼を潰され、断末魔の激痛に苛まれるイシュタールは、もはやびくりと

痙攣するだけだった。

「すぐに楽になんかしてやらねえ」

江梨は憎々しげに、もう一度、イシュタールを蹴り、地下室を見舞わした。地下室の隅で、凶暴な姉妹に辜丸を潰され、半死半生の早坂と亀山が転がっていた。傍らにナイフが落ちていた。

江梨はナイフを拾い上げ、二人の陰囊とペニスを切り取り、それをイシュタールの口に詰め込んだ。イシュタールは喉をつまらせ、苦しげに喘いだ。

優美は、抵抗する力を失ったイシスの髪の毛をつかみ、柵までひきずった。

激痛にぼんやりとしていたイシスは、屋上からはるか真下の地面を見て、急に悲鳴をあげた。必死に抵抗しようとしたが、優美は彼女の股間を蹴って黙らせた。

「お、お願い……殺さないで……」

イシスは涙を流しながら懇願した。

「死にな」

優美は冷たく吹き、イシスを突き落とした。

返り血を浴びた優美と江梨が、玄関に姿を現した。手にダイヤの袋を持っている。亜紀がと若菜が、茂みから姿を現し、優美と江梨を塞ぐように立った。

「まだ、そんなどこにいたの？」

優美が無表情に呟いた。亜紀が口を開こうとしたとき、江梨が「はい」とダイヤの袋を突き出した。

「え？」

亜紀は意表を突かれ、呆気にとられた。江梨が、握りしめた左手を開いてみせた。掌に二十粒ほどのダイヤが乗っていた。

「これだけあれば弟の身代金は払える。残りはあんたらにあげる」

口を開いたまま突っ立っている亜紀の足元に、江梨は袋を置いた。優美は微笑み、若菜の足元に袋を置いた。

「仲良く、分けな」

優美と江梨はすたすたと歩きだした。若菜と亜紀は、足元のダイヤの袋をのぞいた。

ぎっしりと詰まったダイヤ——百粒以上あるだろう——がきらきらと光を放っていた。

若菜と亜紀は顔を見合わせ、同時に叫んだ。

「ちよ、ちよっと待ってよ」

二人は走り出した。